

## 忘れられた叡智を求めて

第23回

**冬**の夜空を見上げ、満天に煌めく無数の星々を眺めるとき、我々の心には、ふと一つの問いが生まれる。

我々の生きる

この宇宙は  
どのようにして  
生まれてきたのか。

その問いに一つの答えを与える現代科学の最先端の理論がある。

インフレーション宇宙論

車椅子の天才科学者、ステイブ・ホーキングや、ロシアの科学者、アレクサンダー・ビレンキンらが提唱するこの最先端宇宙論は、我々の生きるこの宇宙の創生のプロセスを、次のように描く。

## 宇宙ダーウィニズムの深淵

一三七億年前、この宇宙はまだ存在しなかった。時間も空間も、未だ存在しなかった。ただ、そこには、エネルギーに満ちた「真空」だけが存在した。

その真空が、突如、ゆらぎを生じ、一瞬にして大膨張を起し、一つの宇宙を生み出した。さらに、この真空は、次々とゆらぎを生じ、無数の宇宙を誕生させていった。

しかし、そうして誕生した無数の宇宙、生まれたばかりの「赤子の宇宙」は、大半が、すぐに消滅していった。

なぜなら、その宇宙が生まれ持った自然定数、光速や重力などの値が、宇宙の存続に適した組み合わせではなかったからである。

この宇宙だけは、存続した。奇跡的に最適の定数の組み合わせを持って生まれたからである。

そして、存続が許されたこの宇宙は、それから一三七億年の歳月をかけ、その内部に、物質を生み出し、生命を生み出し、その生命進化の果てに、高度な精神を持った我々人類を誕生させたのである。

これが「宇宙ダーウィニズム」と呼ばれる理論であり、生物の進化における「ダーウィン理論」と同様、宇宙の進化における自然淘汰のプロセス、「適者生存の理論」に他ならない。

この最先端宇宙論が描く宇宙創生の姿は、あたかも、水を加熱するときの「気泡」の生成に似ている。

水を加熱すると、温度が上

がるにつれ、水中に無数の気泡が生まれてくる。しかし、それらの気泡の大半は、大きな泡へと成長することなく、瞬く間に消えていく。

されば、我々の生きる宇宙とは、次々と生まれ、儚く消えていった無数の気泡の中で、奇跡的に生き残った、一つの気泡。

その気泡が一三七億年の歳月をかけ、その胎内に生み育てた、我々の生命。その意味を考えると、しばしば使われる一つの言葉の、想像を超えた深淵に気がつく。

「生命の奇跡」

我々は、この言葉の、底知れぬ深淵に、気がつくのである。



田坂広志

[多摩大学大学院教授  
シンクタンク・ソフィア  
バンク代表]